世にあっては苦難があるが勇気を出しなさい

ヨハネ福音書16章25-33節

【新改訳 2017】

16:25 わたしはこれらのことを、あなたがたにたとえで話しました。もはやたとえで話すのではなく、はっきりと父について伝える時が来ます。

16:26 その日には、あなたがたはわたしの名によって求めます。あなたがたに代わってわたしが父に願う、と言うのではありません。

16:27 父ご自身があなたがたを愛しておられるのです。あなたがたがわたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからです。

16:28 わたしは父のもとから出て、世に来ましたが、再び世を去って、父のもとに行きます。」

16:29 弟子たちは言った。「本当に、今あなたははっきりとお話しくださり、何もたとえでは語られません。

16:30 あなたがすべてをご存じであり、だれかがあなたにお尋ねする必要もないことが、今、分かりました。ですから私たちは、あなたが神から来られたことを信じます。」

16:31 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは今、信じているのですか。

16:32 見なさい。その時が来ます。いや、すでに来ています。あなたがたはそれぞれ散らされて自分のところに帰り、わたしを一人残します。しかし、父がわたしとともにおられるので、わたしは一人ではありません。

16:33 これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」

【祈りながら考えよう】

（１）なぜ、主が「弟子たちに代わって父に願ってあげよう」とは言わなくてよいのですか

（２）主イエスは、この世の支配者である悪魔に、どのように勝利しましたか。

（３）キリスト者はなぜ、苦難の多いこの世にあっても平安を持ち、勇敢であることができるのですか。

【解　説】

（１）その日には、あなたがたはわたしの名によって求めます

主は、今まで弟子たちに、ぶどうの木と枝についてや、女が子を産むことについてなど、たとえで霊的真理を話してこられた。しかし、主は「**もはやたとえで話すのではなく、はっきりと父について伝える時が来ます**」と言われて、

「**その日には、あなたがたはわたしの名によって求めます。あなたがたに代わってわたしが父に願う、と言うのではありません**」と語り続けられた。

これは、どういうことを教えておられるのかと言うと、主が地上に弟子たちと一緒におられた時には、弟子たちは何でも主に尋ね、主に求めれば、主が弟子たちに代わって父なる神に求めてくださった。

それは、よく祈れない幼い子供が母親と一緒に祈るようなものである。しかし、少し大きくなると、ひとりで祈ることができるようになる。

主がここで、「**その日には、あなたがたはわたしの名によって求めます**」と言っておられるのは、そのことである。弟子たちは、主のお名前によって、ひとりで祈ることができるようになるというのである。

私たちがキリストのお名前によって祈ると、父なる神が聞いて下さるのは、①キリストの信用のあるお名前のゆえであるということと、②キリストの御心にかなった祈りのゆえであるということと同時に、③キリストが成し遂げてくださった十字架上の贖いによってである。

私たちが祈るのは、何かを頂くために求めることだけではない。私たちが罪を犯し、神の御心を痛めた時、私たちがその罪を告白し、赦しを求めるなら、神はキリストの十字架上の贖いによって、その罪を赦してくださる。

こうして神の赦しを頂いた私たちキリスト者が、神の御前に近づくことができるのは、キリストの十字架上の贖いによってなのである。キリストが十字架上で永遠の贖いを成し遂げてくださったことによって、私たちは御子キリストのお名前によって求めさえすれば、天の父なる神は、私たちに愛のプレゼントをくださるのである。それは、聖霊が降臨されたペンテコステの日から、主が再臨される時までの間に生きるキリスト者の特権である。

（２）あなたがたは、わたしを一人残します

弟子たちは言った。「本当に、今あなたははっきりとお話しくださり、何もたとえでは語られません。あなたがすべてをご存じであり、だれかがあなたにお尋ねする必要もないことが、今、分かりました。」（29-30節）

弟子たちは、主がはっきり語られたことを知って、自分たちとしてはよく分かったと言って、このように信仰の告白をした。「**今、分かりました。ですから私たちは、あなたが神から来られたことを信じます**」

ところが、この信仰告白に対して、主イエス・キリストはこう言われた。「**あなたがたは今、信じているのですか。見なさい。その時が来ます。いや、すでに来ています。あなたがたはそれぞれ散らされて自分のところに帰り、わたしを一人残します。しかし、父がわたしとともにおられるので、わたしは一人ではありません。**」

弟子たちの信仰告白に対するこの主の御言葉は、何か水をかけておられるように思えないでもない。しかし、主は弟子たちの本当の姿を見抜いておられた。弟子たちはりっぱなことを言った。しかし、まもなくその舌の根の乾かぬうちに、もう主を見捨てるのだと語られた。

彼らは、どうして主をひとり残して、逃げ去ってしまったのか。それは、自分たちの身の危険を感じたからである。今日でも、りっぱな信仰告白をした人が、いざ自分の立場が危うくなりそうになったり、自分の名誉が傷つきそうになると、平気でキリスト者らしからぬ言動をすることがある。

私たちはそういう者なのである。たとい自分でそれを否定しても、主は私たちの本当の姿を見抜いておられる。最後に主ひとりを残して、逃げ去ってしまう者であることを、主はよくご存知である。私たちは皆ひとり残らずそうした弱さを持っていることを知る必要がある。

しかし、主はそうではない。主は私たちが主から逃げて行っても、主はひとりではなく、父なる神がいっしょにおられる。ここが私たちと主との違いではないか。私たちも主に堅く結びついていたら、決してひとりぼっちになることもなく、失敗することもないはずである。

（３）勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました

その弱い弟子たちを主はこの世に残していかなければならなかったので、主は弟子たちに対して、どうしても最後に言っておかなければならないことを、こまごまと述べてこられ、最後にその結びとしてこう言われた。

「**これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。**」

主がおられなくなった後、弟子たちにとっては不安はつきまとう。というのは、この悪魔の支配している世の中にあってキリスト者が生きていくということは、決して楽なことではない。

しかし、主はそうしてことをあらかじめ予想しておられて、そのことが起こる前に、弟子たちに話された。だから、ペテロが言っているように、「**愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間で燃えさかる試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、不審に思ってはいけません。むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が現れるときにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。**」（Ⅰペテロ4:12-13）

それが、主が語っておられる「**平安を得るため**」ということである。

私たちキリスト者がこの世に生きていく時、患難があるのは当然のことで、その患難に対して、私たちは自力でそれに立ち向かうのではない。それならば、私たちはいつも敗北と挫折の繰り返しを経験しなければならない。

「**すでに世に勝った**」お方、主イエス・キリストによって勝利を得ることができるのである。ヨハネは、その手紙の中で次のように教えている。

「**世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。**」（Ⅰヨハネ5:5）

なぜイエスを神の子と信じる者は世に勝つことができるのかと言えば、イエス・キリストが世に打ち勝たれた方だからである。

それでは、イエス・キリストは、いつ、どこにおいてこの世に打ち勝たれたのか。主イエス・キリストに対するこの世の支配者、悪魔の攻撃はすさまじいものであった。あの荒野の試みにおいてもそうだったが、それだけでなく、主の地上生活のすべてにわたって行われた。しかし、主はそのすべてに打ち勝たれた。

そして最後に、父なる神の御心に従い、十字架にかかられ、尊いいのちを投げ出された。そのことによって、悪魔に支配され、死を恐れ、おののいている人々を、そこから解放された。次のように教えられている通りである。

「**そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし（無力・無効にし）、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。**」（ヘブル2:14-15）

そして主イエス・キリストは死人の中から復活されることによって、死の力を持っている悪魔に決定的に打ち勝たれたのである。こうして、主イエス・キリストは、地上の全生活を通し、ことに十字架と復活を通して、この世に打ち勝たれた。だから、このお方を信じ、このお方がいつも共にいてくださることを確信しているキリスト者は、勇敢でいることができる。